



広田氏の鍛冶場・和鉄の鍛練



鍛冶師の真骨頂を映像化  
広田一義氏のいきざま  
その技術と心を追求し  
今日もなお生きつづけて  
文化財保存に協力

企画 世田谷区教育委員会  
製作 世田谷を記録する会

企画 世田谷区教育委員会

監修 稲葉和也  
(東海大学助教授  
区文化財保護審議会委員)

製作 世田谷を記録する会

監督・脚本 浅野辰雄

撮影 福沢康道

録音 太田六敏

編集 伊藤博

音楽 松村禎三

尺八 広田史

ナレーター 巖金四郎

題字 広田一義

スタジオ (株) 權の会

現像所 東洋現像所

協力 世田谷区古民家保存プロジェクトチーム

慶元寺

広田一義家

永井金藏家

田中隆之氏

題字 広田一義  
写真 清水讓

倉島幸雄

## 「はじめに」

われわれは庶民史を追求する過程で広田一義氏に出会った。

広田氏は、刀匠であり、行者であり、農民であり、郷土史家であり、またあたたかい家族にかこまれた庶民的なよき父でもある。そして何よりも独特な職人気質と伝統的な技術を身につけた農具鍛冶であった。

誇りと苦しい試練の交錯する七十数年の人生の到達点に、郷土の文化財保存の事業と結びつき、今や火と鉄を相手に、老骨を引っさげて立向っている。

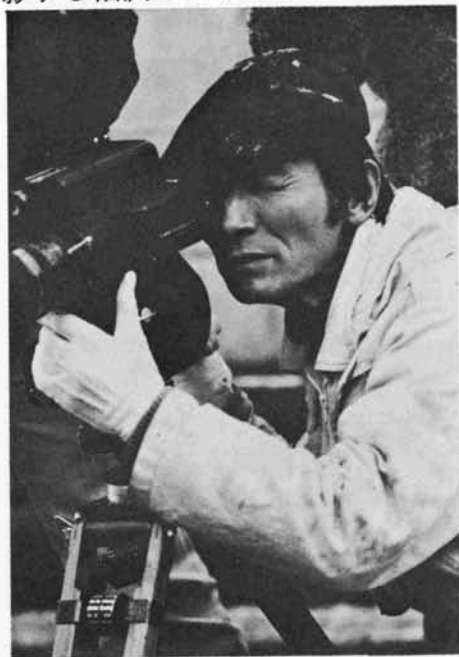
その姿は、こんにち都会からほとんど姿を消してしまつた野鍛冶の典型として、庶民史の一頁にとどめる充分な価値があると信じ、この一篇をおくる。

（浅野辰雄）

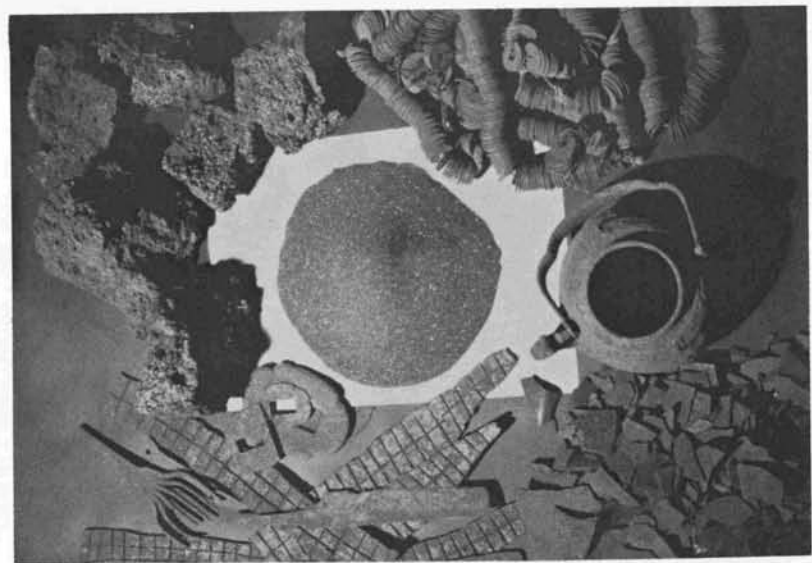


広田師によって作られた刀剣大・小

雪の日炎の燃えさかる鍛冶場を撮影する福沢カメラマン



老鍛冶師は作業に入る前、身につけるわらぞうり、衣装など火にかざして浄める



和鉄の鍛冶材料・砂鉄、ズク、古銭、古農具など



広田氏の奥さんにより鍛冶師の夏・冬の衣装 8 着は手縫いされた。



2人の向う槌により鍛えられる。



燃え上る松炭、フィゴの強弱で炎の色(温度)がかわる。



材料を火床(ほど)に入れて溶かし込む



◀何回も折り返えしては打ち、次第に不純物が除かれてゆく。

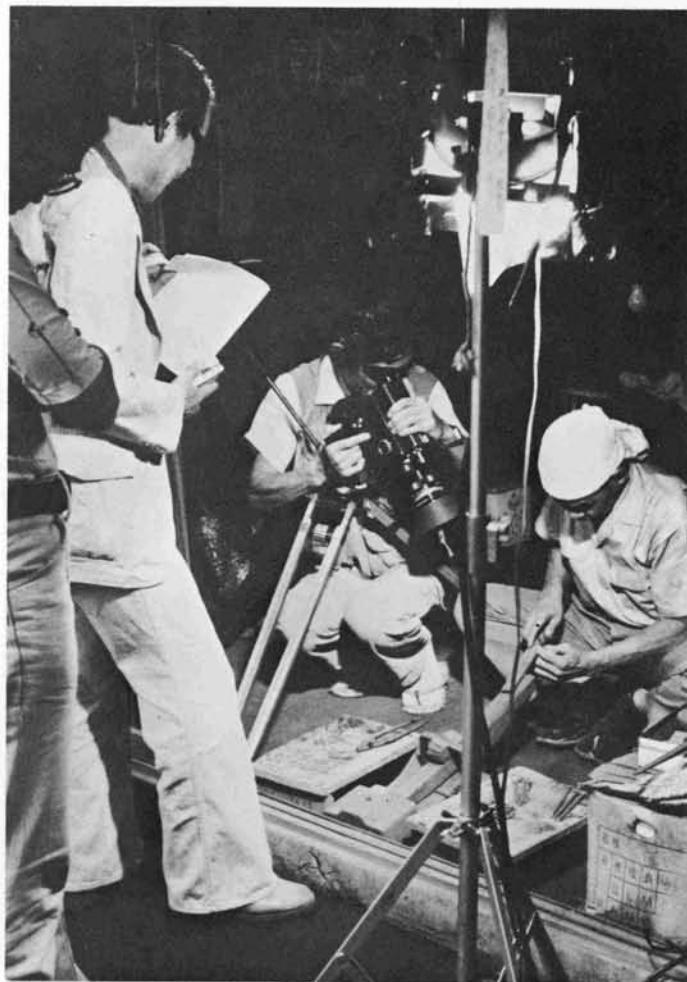




打ち平目(ひらめ)られた鉄は、タガネで細くたち割られる。



素伸べ(すのべ)と呼ばれる細長い鉄棒も火入れされて打ち鍛えられる。



鍛冶場での撮映風景

和釘の仕上げ、釘先がみがかれる。



千部経供養の板碑・広田氏は郷土史家、板碑の他古文書も多く所有している。



鍛冶師のまわりには手際よく道具や設備が並ぶ。  
右にフイゴ、手前に火床(ほど)、左側に金床、戸槽(とぶね)、泥つぼ。



和釘製作が完了した日、3人の子息へ襲命、名命が行なわれた。



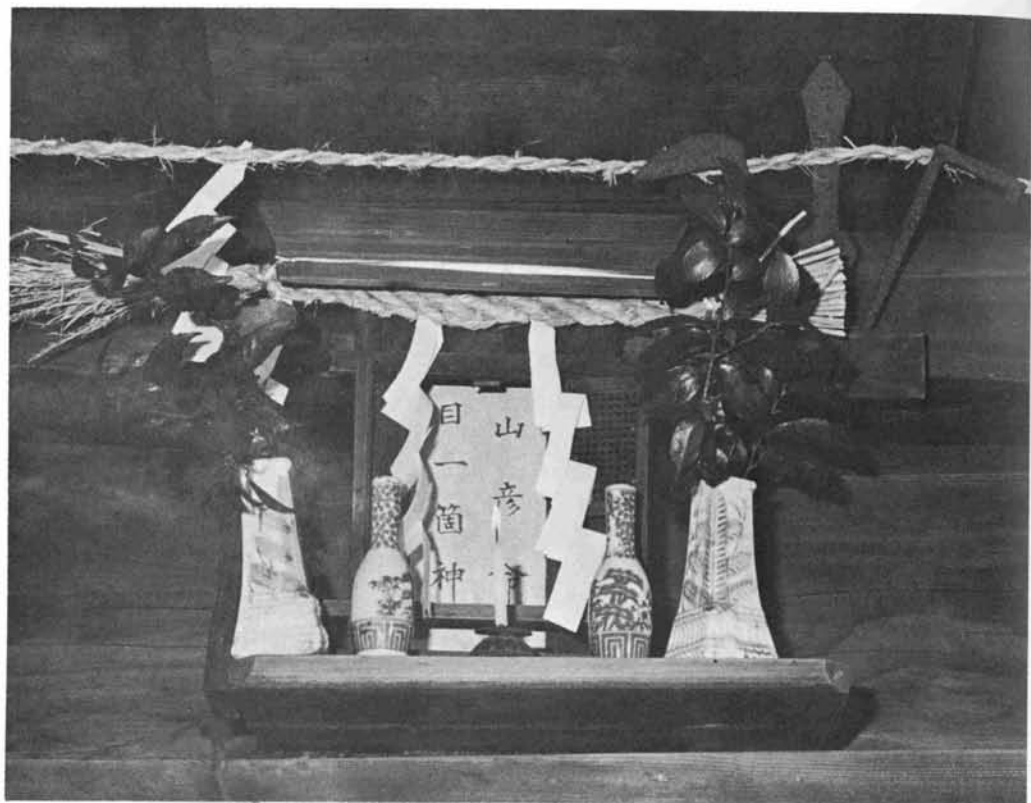
自作の鋤のサビを「せん」という工具で削り落とす。鍛冶屋は自分で使う道具はほとんどつくってしまふ。



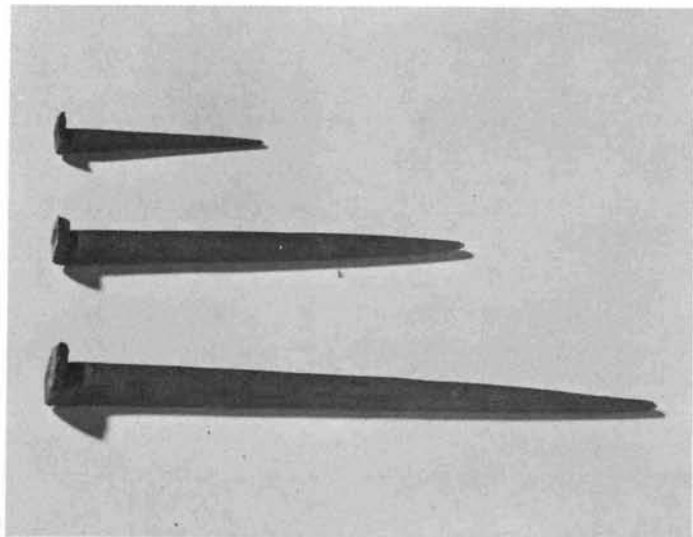
大きいのは2貫目ものの向う槌、用途に応じて大小を使いわける。



フイゴ祭の日、鍛冶師は子供等にミカンを撒いて鍛冶の繁栄と無事を祈った。



鍛冶神天目一箇神と剣、鎌、鍵のミニチュア



完成した三種の和釘、製作本数3千本は岡本民家園に復元された古民家旧長崎家住宅に使われた。